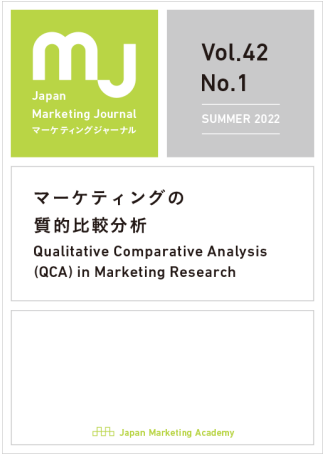
忙しさと 楽しさと 心強さと

第 10 期 OB　石井 隆太

毎年，近況報告の場として，このエッセーを書かせてもらっています。2022 年度の近況報告を，仕事編とプライベート編に分けてお伝えさせて頂きます。

◆仕事の近況：マーケティングジャーナル特集号へ寄稿

マーケティング分野の大規模学会の一つに，マーケティング学会があります。その学会が毎年 4 号発刊している学術雑誌が，『マーケティングジャーナル』です。毎号，著名な先生方が編集者として就任されて，その号の特集テーマを決めたり，執筆者の選定や招待を行ったりされます。ここ数年，小野先生も，この編集者のポジションに就いていらっしゃいます。過去に 3 回，小野先生の編集の下で特集号を発刊しており，小野ゼミ出身の先生方を含めて，多数の先生方が参加されています。3 回目の特集号は，昨年の 6 月に発刊されました。その特集テーマは，質的比較分析（QCA）という分析手法です。概要については，小野先生による特集号の巻頭言を是非ともお読みください。実はこの分析手法は，私が大学院に在籍している頃，「流行の手法があるから皆で勉強しよう」と言って，当時の大学院ゼミメンバーで勉強したものです。この特集テーマが選ばれるキッカケの一つとなり，この特集テーマに私が参加できたのは，この QCA 勉強会のおかげでした。第 9 期 OB の竹内亮介さん（東洋大学）と，第 10 期 OB の中村世名くん（専修大学）も，当時の勉強会参加メンバーで，かつ，この特集号に寄稿していますが，勉強会参加者で寄稿できなかったのが，第 13 期 OB の川村澄明くん（通称かわむー）です。川村くんには，この場をお借りして，御礼をお伝えしたいと思います。当時はどうもありがとう！



QCA 特集号の表紙

2016 年 QCA 勉強会の開催当時のメンバー@鳥取大学院ゼミ夏合宿
（著者は前列左から 2 番目

なお，『マーケティングジャーナル』に掲載された論文の中から，数本の優秀論文に対して贈られる論文賞を，第 9 期の竹内亮介さん・第 17 期の王珏さんの共著論文と共に，拙論にも頂戴いたしました。一人での論文執筆は孤独な作業ですが，この特集号企画は，論集発刊に向けて他の先生方と一緒に頑張るという，ある種の一体感を感じられる企画であると，個人的には思っています。編集者である小野先生，ご一緒した先生方，どうもありがとうございました。

2022 年マーケティングジャーナル論文賞の受賞タイトル一覧

◆プライベートの近況：長女 0 歳→1 歳

大学教員というのは，仕事の融通がつきやすく，決まった時間に拘束されることの少ない職業です。おかげさまで，幼い娘と，長い時間を共にすることができています。育児の大変さにはいろいろな種類がありますし，子供や育児環境にも依存するわけですが，私にとって一番大変だったのは，「予測できないこと」だったように思います。0 歳の時は，まだまだ心も体も不安定で，1 日のルーティンが確立されていないし，心身ともに日々大きく成長するので，いったん確立されたルーティンも，どんどん変化します。ですから，夜は何時間寝るのか，夜泣きはあるのか，どれだけミルクを飲むのか，便秘なのか快便なのかなどの基本的な生活に関して予測できないことはもとより，来客に対してはどんな反応を示すのか分かりませんし，外出先では何がキッカケで泣き出すのかまったく読めません。泣く原因は，時には人だったり，場所だったり，天気だったり，音だったり，いろいろです。ベビーカーで玄関を出た途端に大泣きして出戻りなんてことは，ざらにありました。その予想のできなさに気苦労していました。今思えば，気にするほどのことではなかったのですが，当時は逐一，どうして泣いたのか，なんで寝る時間が短かったのか，何が原因で便秘になったのか，などを調べたり考えたりして疲れていたように思います。1 歳を過ぎると，そうした不確実性はかなり減って，私にとっては，辛さよりも楽しさが勝る育児になってきました。

1 歳になった娘とツーショット

とはいえ，育児と仕事と家事の並立は決して楽ではなく，子供が生まれる前と比べれば，何をするにつけても時間の制約があり，限られた時間の中でタスクをこなさないといけないという意味で忙しいと感じるようになりました。ですが，あとで振り返ってみれば，忙しい時こそ楽しい思い出として蘇ってくるものです。忙しさを心強く乗り越えた充実感が，そういう記憶にしてくれるのでしょう。そんなふうに考えて，今の忙しさを楽しみたいと思います。